



日 口 交 流

発行: 特定非営利活動法人日口交流協会

E-mail:nichiro@nichiro.org

Home Page: http://www.nichiro.org

〒106-0041東京都港区麻布台3-4-14

麻布台マンション401号

Tel : 03 (5563) 0626 Fax: 03 (5563) 0752



会長挨拶

朝妻 幸雄

特定非営利活動法人・日口交流協会会長の朝妻幸雄（あさづま・ゆきお）です。どうぞよろしくお願いいたします。

前会長の有馬朗人先生が2020年末にご病気のため急逝されたことは誠に悲しい事でありました。先生には2006年に会長にご就任いただいて以来長い間お世話になりました。有馬先生は学术界の泰斗として日本だけでなく世界でも著名な方であり、ロシアでも科学技術の分野で交流を重ねてこられました。ここに改めてご功績に対して心より敬意と謝意を表します。

有馬先生の急逝を受けて理事会の決定により凶らずも会長の任に就くことになりました。私自身はロシアとの経済分野を中心に交流を重ねてきました。また商社、日本センターなどの組織で総計30年にわたるロシア滞在中には文化・芸術面での交流にも努めてきました。しかしながら私自身が個人でできることはまことに限られています。長い年月の間、経験と実績を積み重ねてきた伝統ある日口交流協会の中で、会員の皆様と一緒に両国の交流を一層推進することができれば幸甚に存じます。

日口間の交流と相互理解は本来あるべき水準に比べれば現時点では決して満足のものではありません。政治・外交面の両国関係による影響が少なからずあります。だからこそ政治にとらわれない民間交流の推進がいま非常に重要であると考えています。

私たちの日口交流協会の多方面の様々な活動によって少し



でも両国間の民間交流を一層前進させ、相互理解を深め、進めることができればそれに勝る喜びはありません。特にこれからは両国の明日を担う若い世代の交流を一層活発化することが重要です。これまで培ってきた協会の経験と伝統のうえに、若い会員の皆さんが中心になって協会の活動を推進できるようにしたいと考えています。

現在のコロナ感染症によって当協会の活動は各種の制約を受けていますが、その逆風の中でもやれることは少なくありません。コロナはいずれ解消されますが、いまはその時に備える雌伏の時期として粛々と可能な活動を進めていきたいと思えます。

会員の皆様、またこれから会員になることを検討して頂いている皆様、是非日口間の交流と一緒に推進しましょう。

.....
2021年2月理事会において、千葉麻里常任理事が副会長に承認されました。

お願い

NP0日口交流協会では、ロシアでの日本の伝統文化などの紹介、国内でのロシア関連の学習会、ロシア人とのイベント交流など幅広い活動を続けています。これらの活動を一層推進させるために皆様からのご寄付をお願い申し上げます。

一口千円からいくらかでも結構です。

振込先: 郵便口座00160-9-66486、加入者: 日口交流協会
連絡先: 日口交流協会事務局E-Mail:nichiro@nichiro.org
Tel:03-5563-0626 Fax:03-5563-0752

お知らせ

●テーマ別ロシア語「おもてなしロシア語」7

日時: 2021年3月31日、4月4日、4月18日(日)13:30~16:00

場所: 田町リーブラ、多目的室1

講師: オクサーナ・ピスクノワ

授業料: 会員7,000円 一般8,000円

●日本の家庭料理講習会

日時: 2021年4月3日(土)10:00~12:00

場所: 田町リーブラ、料理室

講師: 小野田正子 栄養士

内容: 巻き寿司、その他

会費: 2,000円

*参加は会員の方のみとさせていただきます、密を避けるため人数が限られますので定員に達し次第締め切りといたします。

*エプロン、布巾、持ち帰り用の容器をご持参ください。

*マスク着用をお願いいたします。

申込み、連絡先: 日口交流協会事務局

E-Mail:nichiro@nichiro.org Tel:03-5563-0626

●ロシア語クラス生徒募集中!

水曜/初級2 (17:15~18:15) 初級1A-1 (19:25~20:25)

初級1A-2 (20:30~21:30)

金曜/入門 (18:30~19:30) 初級1B(19:30~20:30)

土曜/上級 (10:00~11:30)

オンラインクラスは初級、中級1、中級2、準中級のグループレッスンが4クラスあります。

*事務所では少人数で実施し、消毒液、パーテーション等用意して十分配慮しておりますが、受講の皆様はマスク着用、換気、手洗い等感染の予防にご協力をお願いいたします。

(緊急事態宣言の際にはオンラインになることもあります) 対面クラス、オンラインクラス共にプライベートレッスンも実施しておりますので、ご希望の方はご相談ください。ベテラン教師陣が皆様をお迎えいたします。

コルド・ナターリア (初~中級)、イローナ・パルフェノワ (中~上級)、タチャナ・スニトコ (初~上級)、ウラジーミル・ボロビエフ (初~中級)、オクサーナ・ピスクノワ

ウズベキスタン便り

寺尾 千之

「NORIKO学級」は、創設者・大崎重勝さんの奥様、紀子さんの名前から命名されました。その経緯が「幸福な定年後」(晶文社'02年発行・ノンフィクションライター足立紀尚著)で語られています。全510ページのこの大型インタビュー集に、当時63歳の大崎さんが、59～82歳までの47名のうちの一人として登場しています。見出し「ウズベキスタンで日本語学校をはじめ」、小見出し「いま思うのは、家内がよく賛成してくれたなあということ」からは、紀子さんへの深い感謝の気持ちと大きな喜びが伝わってきます。

重勝さんは、'93年～'94年、(株)コマツの自動車製造ライン組み立てのプロジェクトマネージャーとしてウズベキスタンに数回滞在了。その間「定年後に、ここで日本語を教えるのも悪くないかな」という気持ちが芽生え、定年前年の'97年6月に紀子さんと一緒に渡航、夏休みのため休校中だった教室を2か月借りて、小学生～大学生までの50人に日本語を教えます。日本で視覚障害者用の音読テープ作成ボランティア活動に従事していた紀子さんは、自身の音声テープを活用しながら、日本語発音の基礎を指導します。人々の日本文化への関心は高く、教室はたちまち満員御礼状態に。ついには、子ども達から「ずっと開いている教室があるといいのになあ」と、乞われてしまいます。



ある夜、赴任以来、公私ともに一方ならぬお世話になっていたナジロフ・アリシエル、ガニシエル兄弟と、酒を酌み交わしているときに、「いつも開いている寺子屋を作ろうか…」と切り出してみます。即座にナジロフ兄弟が彼らのリシタンの土地を提供できると賛同します。その場に居合わせた紀子さんも、何の逡巡もなく「いいわよ」と言ったのです。

'99年11月に設立されたNORIKO学級は、子ども達で溢れかえり、病氣治療で帰国する2年余の間に、「大崎おじさん、紀子おばちゃん」と慕われるようになります。当時中学生だった生徒の一人、ムミノフ・アスロール君は、その後も日本人ボランティア講師のサポートを受けながら日本語学習を続けます。'06年、大学3年生のときに出場した日本語弁論大会で、「白いカラス」をスピーチして入賞、続く中央アジア大会でも好成績を収め、最高峰の「CIS学生日本語弁論大会」(モスクワ開催)に出場、CIS諸地域の選抜メンバー25名の中で優勝するという快挙を成し遂げます。紀子さん直伝の、美しい歌のように語られる彼のスピーチは、多くの審査員を魅了したに違いありません。副賞で'07年1月に来日したアスロール君は、真っ先に京都の紀子さんを訪ねます。その様子が新聞各紙に取り上げられました。(写真参照)見出し「来たよ 日本語の母さん、弁論大会優勝で恩返し」を読むたびに、当時の感動が鮮やかに蘇ります。(リシタン・ジャパンセンター事務局長)

国際放送史研究の戯言No.011

オンライン発表報告・アバウト・モスクワ放送

島田 顕

オンラインでの研究発表をやった。オンライン研究会は昨年度度か参加したが、自分が報告発表者になるのは初めてだった。テーマは「第二次世界大戦中のモスクワ放送—日本語放送の前史から第二次世界大戦中のモニタリング調査まで」。二回に分けての発表。一回目は、予告編で報告の目的と、主な流れ、そしてテーマ自体とはちよつとずれるが、第二次大戦中にコミンテルンが開始した秘密放送(ドイツ語放送の「幽霊の声」、スペイン語放送の「ピレナイカ」、ブルガリア語放送の「フリスト・ボテフ」、イタリア語放送の「ミラノ・リベルタ」など)についてに話した。コロナ禍のために長らく中断していた研究会(桑野塾)の再開後の最初の回で、四人でそれぞれ話すうちの一人に選ばれた。二回目は私のみで、中国での延安新華広範電台(放送局)の日本語放送開始から、1942年のモスクワ放送日本語番組放送の開始の経緯、日本語放送の内容、さらには1944年に行われた日本語放送に対するモニタリング調査、批判と改善の努力について説明した(内容については『日口交流』285、286号の拙稿を参照された)。

今回のオンライン報告発表のために、二つの動画ファイルを用意した。一つは、ロシアの声に勤務していた2000年に制作した20分の番組「ロシアの声 第二次世界大戦終結55周年記念特別番組 ロシアと戦争」の映像化。第二次大戦中の日本語放送について述べているもので、ムヘンシャン、片山やす、野坂龍、コルムイコフら当時の日本語課職員のエピソードがちりばめられていて、私自身と山上智子アナが読み上げを担当している。番組の中で片山やすに対して岡田嘉子がインタビューしていて、両氏の肉声を聞くことができる貴重なものである。ラジオ・スポーツニク時代に、音声アーカイブからいくつかの番組が公開されたものを保存していたのだが、それらの一つが役に立つとは思わなかった。テーマもまさにうってつけ。加えて、この番組は私がロシアの声に勤務したことを示す唯一の証拠といえる(これ以外、私の声を記録したものはどうやら残っていないようだ)。この音声ファイルに、当時の映像、画像を動画編集ソフトを使って盛り込んで、動画ファイルにした。

組は私がロシアの声に勤務したことを示す唯一の証拠といえる(これ以外、私の声を記録したものはどうやら残っていないようだ)。この音声ファイルに、当時の映像、画像を動画編集ソフトを使って盛り込んで、動画ファイルにした。

二つ目の動画ファイルは、発表報告の動画ファイルである。まず、45分の発表原稿(当初は60分のもつりで作ったのだが、推敲を重ね45分に凝縮した)を用意し、それを読み上げて音声ファイルを作る。そして、その音声ファイルにパワー・ポイントで作ったレジュメと写真の画面を40枚ほど盛り込んだ。お恥ずかしいことだが、読み上げは結構苦戦した。しばしばつかえる、いわゆる「かんでしまう」のである。一つ目のものと比べると、自分自身の退化を実感せざるを得ないものとなった。発声練習が十分でなかったことも反省させられる。

質疑応答で特に印象的だったのは、日本語放送の内容がよく伝わらないという第二次大戦当時の日本語放送に対する批判に関することだった。放送が劣悪だった最大の原因はニュース原稿の詰め込みすぎだったと私は結論づけた。だが、詰め込みすぎの弊害は現在に至るまで改善されなかった。先輩である日向寺康雄さんが指摘したのである。確かにそうだった。それで思い出した。レービン課長がタス通信のテレックスを、何度も何度も、私たち日本人職員のもとに持ってきて、翻訳して放送に盛り込むよう促していたことを。しかも録音スタジオにこれから向かうというぎりぎりの時。その一部は日本国内の動きに関するニュースで、モスクワからわざわざ伝える必要がないものだった。それでも何とか放送にのせようとスタジオの前室で翻訳していた先輩諸氏の姿が今でも目に浮かぶ。

報告発表で使った動画ファイルはどのような形になるかわからないが、いずれ公開したいと思っている。その時はここでもお知らせするつもりである。

《モスクワ・アラカト63》

忘れられない清田彰氏の言葉

日向寺 康雄

今年末には、ソ連邦崩壊からついに30年になる。1991年12月25日、日本時間夜のニュースを録音中、スタジオに駆け込んできたアルバイトの留学生（日ソ学院）から渡された手書きのわら半紙には「ゴルバチョフ大統領がソ連邦の存在停止を発表した」との文言があった。「存在の停止とは一体どういうことか？」あまりに唐突で、事の重要性を実感できぬまま、私はテキストをあえて棒読みしたのをよく覚えている。

私の頭には「ソ連がなくなる」と言った推測は、正直言ってなかった。名称は変わっても「形は残る」と考えていた。それほどソ連的日常は当たり前であったし、十月革命の時はあったであろう熱気も興奮も悲壮感も、まして暴力的なエネルギーも、少なくともモスクワでは感じられなかった。あったのは根拠のない不思議と楽観的な明るさだった。

私が今でも忘れられないのは、91年、年明け早々の1月13日ヴィリニウスで起きた血の日曜日事件である。これはバルト三国の中でも最も独立に向けた動きが先鋭化していたリトアニアで発生したもので、放送局をソ連軍特務部隊が取り囲んだ。その日ニュース原稿をもってスタジオに入る前、当時まだ日本課の重鎮として働いておられた清田彰氏は私に「もしここで犠牲者が出たら、日向寺君、ペレストロイカは終わりソ連にもう未来はありませんよ」と言った。そして「人間の盾」となっていた13人が銃撃され亡くなり…氏の予言通り、8月には保守派のクーデターが無様に失敗、年末にソ連は自ら崩れ去った。



岡田嘉子と清田氏

清田氏は、敗戦後極東で捕虜となり、収容されたラーゲリでの「民主運動」の中で共産主義に共鳴しソ連に残った方だが、自分が半生を捧げたソ連社会主義の理想が時と共にどんどん変容し失われてゆく過程を40年以上にわたり、国営放送の内部からじっと御自分の眼で見続けた人である。故郷（岡山）が米軍の空襲に遭い、肉親は全滅、自分は天涯孤独の身になったと知ると（そのように

収容所指導部から伝えられた）、生まれ変わったつもりで第二の人生を平和のために捧げようと決心、共産主義建設に夢を託し過去を捨てた。氏の悔恨の苦しみは、想像するに余りある。しかし私が知る限り「日本に戻らなかった事」への後悔を口にすることは一度もなかった。

実は私にとって清田氏は、ちょっと怖くて近寄りがたい存在だった。何しろレーニンに関する特別番組を制作するため3度も博物館に通った真面目で誠実な人、規律と秩序の人なのだ。

ニュースや解説などの翻訳の誤りを厳しくも的確に指摘し訂正してくれた恩師でありアナウンスの大先輩ではあったが、口元は微笑んでいても相手を射抜くような視線は常に鋭かった。今自分が、あの頃の清田氏と同じ年齢になって思い起こすと「氏が身を置いていた壮絶な孤独とプライドがそうさせていたのだろう」と心が締め付けられるような強い同情と共に、その生き様に日本人として深い畏敬の念を感じる。本年4月16日は、氏がモスクワで亡くなられて、ちょうど10年目に当たる。

（元モスクワ放送チーフアナ・現中央大及び早大非常勤講師）

池田林儀とロシア②

野口 久美子

「永遠の貧乏」（文友社1926）が出版された大正時代と比較して、日本とロシアの関係における明らかな不変と変化がある。「永遠の貧乏」では以下の様に言及されている。

前者では、100年近く前であったにも拘わらず、ロシア人の日本製ビール好きであった。「北滿一帯に賣られてあるビールには、日本ビール、支那ビール、ロシアビールがある。しかし、その中でも、最も好評なのは日本ビールである。日本ビールでは、昔はサッポロが幅を利かせたさうであるが、今ではサクラがなかなかの羽振りである。」ロシア人と会食をした事があれば、彼らが喜んで日本製ビールを飲むのを目の当たりにした人は多いだろう。ある意味、大正時代から現在に至るまで日本のビールは美味しいということでもある。奇しくも、満州のロシア人を魅了した大正浪漫なサクラビールは、昨年6月と今年2月から期間限定でサッポロビールから復刻している。

また「ロシア人は茶で生きて居る。サモワールの沸々たる陽気な気分は、ロシアにおける、茶の一切の生命ともいえる。茶は砂糖で飲むロシア人がその砂糖をあやつる方法に四種あるそうだ。」と綴り、21世紀の現在、コーヒー好きなロシア人が激増したとはいえ、様々な茶をたしなみ、我が国の茶道にも関心を寄せるような茶好きの国民性は不変だと言える。

後者の象徴は「時は一切を解決するものだ。一つの言動を以て、万事を推断し去るのは早計と言わねばならぬ。會ては赤鬼青鬼の如く忌みはばかられたロシアも、今は日本の親友である。何事も雰囲気の中に決定点が定まる。蛇蝎の如く排斥したロシアも、ひとたび握手すれば往年の知友である。日露國交恢復祝賀會の如き、冷ややかにこれを見れば、何の意味か判断がつかぬ。数年前と比較してまるで狐につまづられたような感じがする。わいわいさわいさわい、そこにそうした雰囲気は湧く。湧いた空気が大衆を引きずって行く。世の中はこうしたものだ、世の中はほんとうにこうしたものだ。」という記述ではないか。当時、日本にロシア正教や白系ロシア人が入り、ロシア文化との接触はごく普通の日本人とのレベルで実現され始め、政治的に対立する事由は見当たらなかった。新たな関係は始まっていた。政治的に深くドイツを信奉した池田でさえ、ロシアが日本の「親友」と言い、それまでの両国間の関係に思いを馳せれば、強いギャップを感じていることは顕著だ。あれ程敵対した国と国交を結び、関係を拡大していくパラダイムシフトは、かくも大きく、過ぎ去ってみれば、あまりにも呆気ない。

今日、我々がこの段階に至るまでに長い道程を経なくてはならないことは事実だが、然るべき時の経過によって「一切を解決する」パラダイムシフトの到来を待望するほかない。（理事）

北ロシアの古都ヴォーログダ

畔上 明

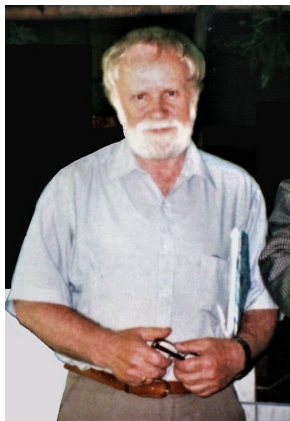
1990年代半ばに教授職を辞し昨年秋に永眠されるまでロシアの友人たちとの豊かな交流関係を人生の糧とされた安井亮平先生、かけがえのない恩師を偲びつつ書き残された農民派作家ベローフに就いての美しい文章を読み返すにつれ、四半世紀前の最初にヴォーログダを訪れた秋の日の思い出が蘇ってきます。

北ロシアにこそロシア本来の文化が残されていると聞かされ、当時ドイツ出張の帰路モスクワでの乗継便を二日先に変更し夜行列車でヴォーログダへと足を延ばしたのでした。モスクワから北北東にヤロスラヴリを通過した470km先のヴォーログダは、西北西に折返して660kmの線を引いた先がサンクト・ペテルブルクです。ペテルブルクからモスクワ迄がほぼ同様の距離であり、モスクワ東北部に二等辺三角形を描いた頂点の一つが古都ヴォーログダとなるわけです。

駅より2km北上すればヴォーログダ川に突き当たり、その手前にイワン雷帝が建てた聖ソフィア大聖堂を中心とするクレムリンの景観が広がります。川との絶妙な調和は時間を忘れさせる美しさがあります。

ヴォーログダ川は東のスホナ川に注ぎ、558kmのスホナ川は東北東の古都、マローズおじさん（ロシアのサンタククロス）の発祥地であるヴェリーキー・ウースチュグで北ドヴィナ川と合流、更に650km北西に流れてアルハングリスク港で白海へと抜け出ます。

300年前にピョートル大帝によってバルト海への出口であるサンクト・ペテルブルクが建都されるまでは、ヨーロッパとロシアとの交易は白海から北ドヴィナ川を経由したルートでした。それ故に、その途上であるヴォーログダはロシア中世の経済、文化面での輝かしい時代を築いていたのです。



ヴォーログダから来日した農民派作家のワシリー・ベローフさん

安井先生の無二の親友であったベローフさんが本拠地としていたヴォーログダへは作家が終焉を迎える2012年までに十三回、更に北100kmのハーロフスクを経由しその先地図上では8kmながら、森と集落を曲りくねった凸凹道80kmを2時間近く掛けての作家の故郷の村チモーニハ迄へと六回訪問された先生にとっては、大都会で過ごしただけでは知り得ない、ロシアの多層性、北方文化のルーツであるフィン・ウゴールを含む地域性、風土についても考察されていたのでした。

先生がベローフさんを1997年6月に日本に招待された時には、その前年度ヴォーログダを訪れた日本人ということでご紹介頂く幸運を得た私は、その後も、作家同盟ヴォーログダ支部長であり文化保護活動に尽力する詩人のミーシャ・カラチョーフさんの1999年11月訪日時にも交流する場を与えられ浅草で日本酒を酌み交わしたのでした。2000年にヤロスラヴリに出張した時には210km先がヴォーログダであるということでミーシャに連絡を入れるとは是非立寄れとのこと、僅か3時間ほどの滞在であったにもかかわらず、駅まで友人の車で出迎えてくれヴォーログダ・クレムリン近くのミーシャ宅へ。卓からあふれ出さんばかりのご馳走が用意され、ロシアの人の底知れないもてなしに圧倒されたものでした。その後、ヴォーログダからは20年以上に亘って届く新年のご挨拶、北方ロシアへの関心は絶えません。

(「プロコ・エアサービス」シニア・アドバイザー)

モスクワ「ムゼイ」巡り・その25

バーチャル版トレチャコフ美術館 (その1)

大矢 温

Дворец Царя Алексея Михайловича

今回はモスクワ観光の名所、トレチャコフ美術館。とはいえ、時節柄おいそれと訪れることはできない。というわけで今回はバーチャル版。Google Street Viewで館内を駆け足で探索してみよう。

まずは時代順にアイコン・コーナーから。アンドレイ・ルブリョフ「至聖三者」(三位一体)をはじめとして国宝級のアイコンが展示されている。この「至聖三者」、もともとは聖セルギイ大修道院(ソ連時代はザゴールスクと呼ばれていた)の御本尊だったが、革命後にトレチャコフ美術館に収められた。「父・子・霊」の三者を象徴する三人の天使が描かれている。



同じくアイコン・コーナーにはフェオファン・グレークの「ドン生神女」(聖母)もある。こちらは「奇跡のアイコン」と呼ばれる格が高いアイコンだ。「ドンの」と呼ばれる由来は、1380年にモスクワ大公ドミトリー・ドンスコイがドン川の合戦でモンゴル軍と戦った際にこのアイコンを掲げて勝利し、それがきっかけでルーシが「タタール



のくびき」とよばれるモンゴル人の支配から脱したことにちなむ。戦勝をもたらした「奇跡のアイコン」だ。もともとはモスクワのドンスキー修道院の御本尊だが、革命後にトレチャコフ美術館に収納された。裏に回ってみると裏面もアイコンになっていることがわかんと思う。聖俗を区切るイコノスタスと呼ばれる壁に嵌め込むアイコンは裏側からも拝めるように両面に聖像が描かれているものもあるのだ。



トレチャコフを代表する「大作」ということでアレクサンドル・イヴァノフの「民衆の前に現れたキリスト」も見ておきたい。荒野の修行から帰還したキリストを迎える人々を描いたものだが、なんといってもサイズに驚かされる。縦5.4m横7.5m。畳に換算すれば24畳以上。1837年から20年がかりで完成させた。描かれた群衆の視線を追っていくと渦巻き状に中心のキリストに焦点が当たるような構図になっている。展示室の左右の壁には、多数の下絵が展示されている。この作品を作成するにあたってイヴァノフが群衆一人ひとり、その表現をいろいろ研究していたことがわかる。

(札幌大学地域共創学群 教授)